新しい風景へ

清水章雄

年に一度か二度思い出したように山に登る私には、樹木の茂った山の中で現在地を知ることは、なかなか容易なことではない。深山幽谷、人の絶えて通らぬ山道など、もとより近づくはずもないのだが、自らの進路を決めるためには、コンパスと地図を使うことに習熟していなければうまく行くはずがない。ところが、この地図というのがやっかいなもので、正確、精密に作られていればいるほど、初心者の感覚をうらぎるものであるようだ。かくて道に迷うことになる。山のベテランに言わせると、このような場合、あわててふもとへ降りようとして下へ道をとることが多いのだが、それはかえって危険で山の尾根へ出るようにしなくてはいけないのだそうだ。見はらしのきく場所に立つことが肝要だという。

別に山から教訓をひきだそうとは思わないのだが、展望も回顧も一度は山頂とは言わないまでも、尾根筋ぐらいには立ってみないとどうにもならない。しかし、実は尾根筋へ出る道をどうやって見つけるかこそがむつかしい。今、そんな気がしみじみする。

道行ということを三、四年考えているのだが、尾根筋への道が見つからない。ただ道行というのは文学を考えるときに決して行き止まりの道ではなさそうである。言うまでもないことだが、道行は日本の古典文学にしばしば登場する。古事記から歌舞伎まで、時代はかりでなくジャンルを踏み越えてそれは見出される。文学というより祭祀や芸能に深く関っている点でも我々を奥へと誘ってくれそうな気がする。近頃、神道集や説経節を読んだりするのだが、それらの中にも道行が見られて興味深い。説経節の一部を掲げよう。

車の檀那御覧じて、かほど涼しき宮を、たれが熱田と付けたよな。熱田大明神を引き過ぎて、坂はなけれどうたう坂、新しけれど古渡、緑の苗を引き植ゑて、黒田と聞けば、いつも頼もしのこの宿や。杭瀬川の川風が、身に冷やかにしむよさて、おほくま河原を引き過ぎて、お急ぎあれば程もなく、土の車をたれもただ引くとは思はねど、善行車のことなれば、美濃の国青墓の宿よろづ屋の、君の長殿の門となり、なにたる因果の御縁やら、車が三日すたるなり。（説経集「をぐり」新潮社版）

閻魔大王の計らいで蘇生した餓鬼阿弥小栗が土車に乗せられ、熊野の湯までの長い道行をする詞章の一部分である。延々と続く道行が相模から熊野への旅程をのべるものであるにしても、それが死から生への蘇生（よみがえり）の旅でもある点に注目しないわけにはゆかない。死へ強く傾斜するのは中世の特色だからだろうか。では近松の道行はどうなるのか。古代ということになれば、影媛の歌を思い出して、照手姫と比較してみたくもなる。又、ヤマトタケルの敗走も広く道行と考えるならミヤズヒメの存在との関りをも興味をひくことになる。確かに道行は生と死の世界をつなぐが、その方向が一致しているわけではないし、女性の関り方にしても一様ではない。道行の表現そのものも単純に結びあわせられるほど似ているとは言えない。だが、一度はこれらを大きく道行というカッコでくく

ってみることなしには、何故死や再生に関る場面で道行が要請されてくるのか見えてはこないのではないか。表現の背後にある想像力を今明確につかんでいる訳ではないが、呪術的な詞章がさかいを越える力を持つように思われる。後世のような美文のスタイルをとるのも、韻律をもつ言葉で道行が構成されねばならなかったことの名残のようだ。

韻律をもつ表現のうちでも、説経節の中では、

坂はなけれどうたふ坂
新しけれど古渡

が万葉集巻十六、乞食者詠（三八八六）の

置くとも　おくなに到り
つかねども　つくのに至り

という表現と類似している。逆接で上下がむすばれている点が同じである。即興的で軽妙な表現だと思うのだが、右のような単純な反対語を重ねる表現は、言語遊戯と断定するにはまだ少し早い気がする。同義を反復するような表現とともに、我々がすでに義を解することのできぬ「枕詞」と対峙するようにそれが存在することを忘れてはなるまい。

古代文学という山をお前はどれだけ登ったのかと問われれば、黙ってうつむくしか手はないのだが、何とか尾根道へ出てみたいという気持も又、心の内につのる。中世の文学だけが有効であるなどとは少しも思わないのだが、何よりもそれが、当面の目標である古代文学をあざやかに浮かび上らせてくれるように思う。とりわけ口誦的要素を多く含むものが有効であるまいか。

もとより、こうしたことは先人たちの指摘もあり、立派な研究も存在する。しかし、実際手にとって読んでみると、尾根筋にでも出たように景色がひらける感じがする。

今現在も古代文学のことを考えなくてはならず、山中彷徨といった有様だが、中世近世の文学や古代の「非文学」文献が小径を私に与えてくれることはまちがいなさそうである。この小径が尾根道へ続き、先人達が見た景観をいつかは私も手に入れることができるだろうか。あわよくば、歩を一歩進めて新しい景観にさえ出会うことが……。